様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１２５

研究課題名（和文）プロヴァンス地方のロマネスク美術における擬古主義

研究課題名（英文）Archaism in the Romanesque Art of Provence

研究代表者
奈良澤　由美（NARASAWA, YUMI）

城西大学・現代政策学部・准教授

研究者番号：６０２５１３７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：プロヴァンス地方のロマネスク聖堂において、聖人崇敬の礼拝空間の創造のための「擬古的な演出」が特に明確である作例の現地調査、記録、分析を行い、またそれぞれに関する歴史資料、発掘報告書などを収集して検討した。これら擬古的作例の研究から「過去のねつ造」の意図性が検証された。
また、初期中世からロマネスク時代までの年代判別の難しい装飾モティーフ（アカンサス、パルメット、組み紐模様など）を持つ彫刻群の調査を行い、その分析研究のために、地中海地域の広い時代にまたがった装飾に関する参考文献・図像資料を収集し、比較研究を進めた。

研究成果の概要（英文）：This study verified “intentional archaism” which can be revealed in some Romanesque churches in Provence. I examined several typical monuments, whose origins can be traced back to the Early Middle Ages, in which were created places of worship for their saints in the Romanesque period. Examples include the Abbey of Saint-Victor of Marseille, the Sainte-Marie-et-Saint-Veran Church of Fontaine-de-Vaucluse and the Sainte-Anne Cathedral of Apt. Analysis of the decor was carried out to obtain a more precise dating. I also studied the re-use of ancient stones in each space of worship, which displayed their tradition.
As a comparative study, I have widely documented several archaistic decorative motifs used in Romanesque art in Provence, such as acanthus and interlacing.

研究分野：西洋中世美術史

キーワード：宗教美術　礼拝空間　聖人崇敬　プロヴァンス地方　典礼備品　装飾　彫刻　マルセイユ

１．研究開始当初の背景
南フランスのロマネスク美術と古代美術との関係については、これまで比較的多数の研究がなされてきている。いわゆるグレゴリウス改革の時代の「起源への回帰」を目指した復古主義とも関連付けられ、建築や彫刻に古代的様式やモティーフが顕著に現れる。本研究の対象は、しかし、こうした「古代風」作例とは範疇を完全には一致していない。
本研究代表者はフランス南東部の祭壇の調査に長年にわたり携わってきたが、その研究過程で浮かび上がった特に興味深い問題のひとつが、古い形・装飾の継続ないし復活であった。祭壇は聖別によって特別な価値を与えられるがゆえ、さらには、聖堂自体の聖別と直接に関係し、聖堂の起源の時代につながりうる存在であるがゆえ、古い形状を持っているということは特に重要な意味があったと想像される。その「擬古性」ゆえ、年代の判定が非常に困難である作例が多く、それが祭壇研究についての最大の障壁であった。その分析解明を進めていく過程で、そうした事象は祭壇ばかりでなく、11～12 世紀のプロヴァンス地方の多数の聖堂や装飾に観察されるということ、それらの分析研究がいまだ十分になされていないために、この地方の初期中世の作例についての年代推定がいまだ不十分であるという問題意識を持つに至った。

２．研究の目的
本研究は、プロヴァンス地方のロマネスク聖堂の装飾や典礼備品などにおいて、古キリスト教時代や初期中世の作風を意図的に「模倣」ないし「偽造」した作例を分析し、過去の様式を意図的に創出した擬古主義的な意図を研究することを目的としている。
古キリスト教時代に遡る聖人伝説と結びつく聖堂が、古い祭壇や彫刻、そして新たに擬古的に制作された彫刻などを使用しながら、「過去」に相応しい礼拝空間をロマネスク時代に新たに整備している事例について調査することを目的とする。
こうした「擬古主義」的事例において重要であるのは、再利用の問題であるが、古代の石棺や祭壇が、改変を加えられながらロマネスク教会内に再利用されている例、さらには、再利用を偽装した「擬古的」な彫刻群の存在が指摘できるが、これまで系統的な研究対象となっていない。それらの調査に着手する。
また、初期中世からロマネスク時代までの年代判別の難しい装飾モティーフ（特にパルメット、アカンサス、組み紐模様、アーチ模様）を持つ彫刻群についての調査を行い、しばしば「擬古的」彫刻に多用されるこれらのモティーフの分析研究を行う。

３．研究の方法
聖人崇敬の礼拝空間の創造のために「擬古的な演出」が特に明確であり、かつ保存状態の良いいくつかの重要なロマネスク聖堂について現地調査を行う。写真資料・デッサンを作成する。遺構の歴史資料、発掘報告などの資料を収集・検討する。
初期中世からロマネスク時代の装飾モティーフについては、広範な資料調査と比較研究を行う。

４．研究成果
（1）マルセイユ（ブーシュ＝デュ＝ローヌ県）のサン=ヴィクトール修道院の起源をめぐる問題について、歴史資料を収集し検討。一方、現クリプトの現地調査、記録、分析を行い、また過去の発掘報告書を再検討。分析調査は、いわゆる「聖ラザロのグロット」の礼拝空間が創設されたころに、隣接するノートル・ダム・ドゥ・コンフェッショォン礼拝堂とその周辺には 5 世紀の典礼備品・彫刻が多数残されており、「過去」にふさわしい内装を演出しうる環境にあったことという仮定を裏付けた。また 11 世紀前半以降の文書の偽造と、礼拝空間の「擬古的な」整備にどの程度互換性があるのかを検討し、いわゆる「聖ラザロのグロット」の礼拝空間が創設された時期をどの程度限定できるのかを考察し年代比定。特にその「顔の柱」について解釈を進めた。同修道院の初期中世の柱頭装飾についても調査。

（2）サント＝マリー＝エ＝サン＝ヴェラン聖堂（ヴォークリューズ県、フォンテーヌ・ド・ヴォークリューズ）、およびサン＝タンヌ旧司教座聖堂クリプト（ヴォークリューズ県、アプト）の現地調査を行い、聖人崇敬のための擬古的性格を持つそれぞれの礼拝堂の再利用材の状態を検証した。ロマネスク期に整備された聖堂内にはめ込まれた組み紐模様の典礼備品彫刻石材の断片や初期キリスト教時代的形態を有する祭壇などの記録と年代確認を行った。また、19 世紀末以降の礼拝空間の再整備の状態も確認。カヴァイヨン（同県）のノートル・ダム・デ・ヴィニェール小聖堂については、発掘調査報告書および歴史資料を収集、同コミューヌ博物館に保存される祭壇卓とともに再検討を行った。またブルグ＝サン＝タンデオル（アルデーシュ県）のサン＝タンデオル教会堂の至聖所に安置されていた石棺について資料収集、分析を行った。
これらのモニュメントについての研究により、「過去のねつ造」の意図性が肯定的に検証される。検証の過程で、ロマネスク時代の擬古的演出において古キリスト教時代とカロリング時代の認識の違いがあったのかどうか、また 11 世紀前半のロマネスク的礼拝空間の萌芽期の前にどの程度の「断絶」が存在したのか、それは過去の記憶にどの程度影響を与えたのか、問題意識を持つに

いたる。

（3）南ガリア地域の古代末期（4〜7 世紀）の集落、墓地、聖域からの中世の集落、墓地およびキリスト教聖堂への移行について、その継続と断絶の状況を検討するために、都市および田舎環境の地誌研究に関する資料収集を進め、現時点での研究状況における問題点を明確にすることを試みた。古代末期のトポグラフィーについての研究を集中的に進めたことにより、中世期における礼拝空間に関する「記憶」と古代末期の実際の状況の照らし合わせが明確となり、また都市ごとに様々な問題点を抱えている現在の研究状況を把握した。

（4）プロヴァンス地方のキリスト教聖堂の古代末期からロマネスク時代へ至る時代の典礼備品と彫刻に関する研究を進めた。特にリエズ（アルプ=ド=オート=プロヴァンス県）の事例について、5〜6 世紀およびカロリング朝期の司教座聖堂の典礼備品に関わる彫刻の復元案作成のための研究と、ロマネスク時代以降における過去の装飾の残存状況に関する研究を継続的に行った。さらにプロヴァンス地方全体の初期中世の彫刻遺物についてある程度網羅的な事例把握および様式研究を進展させ、ロマネスク時代の様相との比較研究の精密化を可能にし、ロマネスク時代における初期中世の「記憶」と実際の状況の照らし合わせを明確にした。

（5）キリスト教聖堂の典礼空間について通時代的な考察を進めたが、古代末期からゴシック時代へ、さらにトリエント公会議後から現代まで、関連研究資料の収集を行い、その模索と変遷について考察を行った。その過程で、ロマネスク時代のプロヴァンス地方の至聖所の様相のいくつかの特性が検証され、特に、シュントロノンとカテドラを伴った初期キリスト教的な至聖所の復活は、ロマネスク後期の当該地方の特徴的であり、その背景を探るためには、フランス北部との比較研究を進めることの必要性を認識した。

（6）プロヴァンス地方における組み紐装飾、パルメット装飾、アカンサス装飾の「擬古性」についての考察のために、地中海地域の広い時代について、装飾と装飾性の問題に関する参考文献・図像資料を収集し、比較研究を進めた。装飾研究を時代的かつ地域的に広い範囲で進めたことにより、プロヴァンス地方のロマネスク時代の装飾様式の比較研究をより精密に行うことが可能となった。装飾美術の特殊な発展原理と擬古的性格のなかで、本地方における装飾モティーフの編年がある程度明確になってきたと思われる。

またマーヌ（アルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県）のサラゴン修道院の教会ファッサードおよび内部壁面に組み込まれたアカンサス等の「擬古的」な装飾彫刻について、現地調査を行い、様式分析と地方性の考察を行った。
組み紐装飾の「擬古性」について、中期ビザンティン美術との比較研究を進めるために、イスタンブルおよびリキア地方を調査した。本調査においては、ミュラの聖ニコラウス聖堂、クサントス遺跡、アンタルヤ博物館、トロス司教座聖堂遺跡などを視察し、彫刻石材の調査分析を行った。また文献資料を収集した。中期ビザンティン時代の装飾模様の成立をめぐる問題への取り組みは、ロマネスク美術における組み紐模様の考察と密接に結びつくため、今後の比較研究への第一歩となったと考える。装飾美術の特殊な発展原理と擬古的性格のなかで、組み紐模様の中世美術での位置づけを今後試みる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 奈良澤由美「エウカリスティアの祭儀の典礼空間における聖性の強調と信徒の参加　フランスの事例を中心に 」『西洋美術研究』18, 2014, pp. 54-75.

② 奈良澤由美　「トロス司教座聖堂出土の装飾石材について　―　2013 年度および 2014 年度の発掘から 」『史苑』18, 2015, pp. 377-386.

③ NARASAWA (Y.), « À propos des aménagements liturgiques de l'Antiquité tardive et du haut Moyen Age en Provence », Annales du Midi, no. 294, 2016, pp. 167-178.

〔学会発表〕（計　1 件）

① 奈良澤由美「南ガリアのキリスト教聖堂における典礼空間と埋葬」2014 年西洋史学会　2014 年 5 月 31 日　立教大学（東京都豊島区西池袋）

〔図書〕（計　　2 件）

① NARASAWA (Y.) - *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule : 5e-12e siècles*, (*Bibliothèque de l'Antiquité tardive* 27),

Brepols Publisher, Turnhout, 2015. 594 pp.

② 『古代地中海の聖域と社会』浦野聡編 勉誠出版　2017 年 2 月刊行　（第 7 章：奈良澤由美　「キリスト教的空間の成立　―　南ガリアの都市と礼拝 」297-338 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
奈良澤　由美　（NARASAWA Yumi）
城西大学　現代政策学部　准教授
研究者番号：60251378

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)